

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中国における諸民族の文化資源を考える：共同研究：  
中国における民族文化の資源化とポリテクス—南部  
地域を中心とした人類学・歴史学的研究  
(2010-2012)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4890">http://hdl.handle.net/10502/4890</a>

共同研究 ● 中国における民族文化の資源化とポリティクス  
—南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究 (2010-2012)



広西、宜州市流河寨でのチワン族の民族舞踊ショー。劉三姐の故郷として観光コースに組み入れられている。劉三姐は伝説上の歌姫として1960年代に映画化され、広西やチワン族のシンボルとして有名になった。

#### 研究の背景

2000年代に入って日本の人類学界で注目を集めているテーマの一つが「文化資源」に関わる諸問題である。とりわけ「文化資源学会」の設立(2002年)や論文集「資源人類学」シリーズ(全9巻)の刊行などの動きは、目に見えてこの方面への関心の高まりを示している。本共同研究を立ち上げるに当たっても、2006-2009年度の共同研究「民族文化資源の生成と変貌—華南地域を中心とした人類学・歴史学的研究」(代表者:武内房司)において中国西南部の諸民族の文化資源に関する諸問題を検討した経験をふまえた。文化資源の概念として、今村仁司は「何かに役立つ」手法的な意味が強いことを挙げ(今村 2004: 13)、清水展はそれを受けて、文化を資源とすることは「行為者が文化を対象として実体化あるいは客体化し、それを提示したり操作したり活用したりすることによって、利益や効用を得ること」としている(清水 2007: 127)。また、木下直之は「資源ゴミ」の比喩を用いて、ゴミとゴミでないものの境界線を「有用性」の有無としている(木下 2002: 4-5)。上記は文化資源の概念の一面を取り上げたにすぎないが、このような「有用性」や、「何かに役立つ」ち「利益や効用を得る」という点は、経済発展の進展にともない経済的利益の追求が目立つ今日の中国に多かれ少なかれ当てはまるように推測される。それでは、中国のそれぞれの民族において、文化資源をめぐるどのような現象が生起しているのだろうか。この点を検討することで、中国の諸民族文化について新たな知見を得ることができるように思われる。

#### 研究の目的

いうまでもなく中国は少数民族や漢族など多くの民族集団が存在する多民

族国家である。それら民族集団の文化は、近現代において資源化され続けてきたのであり、グローバル化の進む現在もその動きが進行中である。文化資源の多様性やその生成と変貌のありようについては前掲の共同研究で一定程度明らかにしえた。文化資源の内容は本来広範にわたるが、「文字による記録・モニュメント・衣装や技術・写真映像等の有形無形の表象形式など、民族の過去の記憶や自らの同時代的経験を文化として継承し発信することを可能とする資料の総体」として位置付けた(武内の定義による)。

前共同研究で取り上げられた地域、民族、テーマは多岐にわたった。その成果はもっか編集集中であるが、武内による実績報告書(2010年4月23日)を参考にしつつ筆者なりにまとめると大きく分けて二つの点が挙げられる。まず、文化資源の多様な存在形態が明らかにされた。たとえば、ナシ族のトンパ文字、タイ族の貝葉文化、ミエン族やモン族の文字・儀礼文書、毛沢東バッジ、チワン族の高床式住居や劉三姐をめぐる観光、トン族の民間劇、漢族の宗祠、八二族の土司や棚田、さらに各地の「生態博物館」などが取り上げられた。2008年5月に大地震にみまわれた四川のチャン族についても、復興の過程における文化の創出の問題が提起された。

第二に、文化が資源化されていく過程において、各級政府や知識人がどのように関与してきたのかというポリティクスの問題が扱われた。たとえば、広西の劉三姐観光の振興は、政府が提唱し、学者がそのための議論をし、企業が関与して観光路線・施設・イベントを考案・創出した。雲南のラフ族は瓢箪をエスニック・シンボルとするが、それに関わる行事を政府が創出し宣伝している。広西のトン族の村の芝居が省級の劇に発展する過程において政府や知識人の関与が見られた。先の四川の復興過程においては政府が建造物などにチャン族らしさを創出する政策を推進した。このほか、政府が主導して民族文化の保護と観光や宣伝への活用を兼ねて生態博物館を各地に創設した。加えて、国内の政府や知識人が関与するほか、国外の知識人のまなざしが契機となってミエン族の由来を記した文書「評皇券牒」が注目されるなど、外部からの目によって自らの文化資源を再発見する動きも取り上げられた。

本共同研究の目的は、前回の成果をふまえて、現代の中国諸民族の社会において、文化がどのように保存・発展・利用され資源化されているのか、またそこにかなるポリティクスが働いているのかのダイナミズムについて深く掘り下げた検討をすることにある。後者についていえば、文化の資源化に際してさまざまな主体、中央・地方の各級政府、知識人、企業、一般民(都市住民、農民など)の間で



劉三姐の「故居」。一見、普通の民家だが、1990年代に劉三姐がテレビドラマで取り上げられ、そのロケの際に作られた。



トンパ画譜(雲南、ジャングリラ県三壩郷、2007年制作)。ナシ族の宗教的職能者トンパが宗教性をおびた文字と絵を描いた紙片。厄除けや招福の意味があり、不幸があった時はトンパに頼んで描いてもらい、家の戸口の上などにはる。経典より大きいサイズの紙に、超自然的存在の姿とともにトンパ文字で書かれている(横山廣子撮影)。

いかなる「せめぎあい」が見られるのかを解明することが挙げられる。たとえば、広西の劉三姐観光の振興においては学者が積極的に関わった。筆者の知る限り、中国の学者は事実を解明する研究に従事するのみならず、研究を通じた政府への貢献を重視してきた。こうした動きを通じて、中国的な知識人の存在形態、知のありようをも探求することが可能になる。また、中国の「民族」は一枚岩でなく、地域集団あるいは複数の支系の集合体である場合が少なくない。劉三姐観光についてもその故郷や由来をめぐって複数の地点で綱引きが行われている。そうした動きは当然、政府や学者、企業を巻き込むことになる。一般民の場合、観光によって利益を得ることができる条件に恵まれた者とそうでない者、また利益を享受する者の中でも土産物など商品売りの者や民族舞踊に出演する者など多様であり、彼ら間での競争は絶えない。「せめぎあい」は政府から一般民まで諸主体に及ぶのである。こうした「民族」内部のさまざまな立場の人々が展開する複雑な動きを把握することは、中国の「民族」の理解をいっそう深めるであろう。

#### 民族・地域研究、およびそれらを越える研究

本共同研究では特定の地域・民族を深く掘り下げて研究している者が多く参加している。メンバー20名について主に研究している地域・民族を挙げると次のようになる(カッコ内は地域・民族名)。稲村務(雲南のハニ族)、樫永真佐夫(ベトナムのタイ族)、片岡樹(タイと中国のラフ族)、兼重努(広西・貴州のトン族)、韓敏(中国の漢族)、瀬川昌久(広東の漢族、ショオ族)、曾士才(貴州のミャオ族、漢族)、武内房司(貴州のミャオ族、ブイ族、ベトナム西北部と雲南の諸民族)、谷口裕久(タイ・ベトナムと中国のモン族)、塚田誠之(広西のチワン族)、長谷千代子(雲南のタイ族)、長谷川清(雲南のタイ族)、松岡正子(四川のチャン族、チベット族)、横山廣子(雲南のペー族、ナシ族)、吉野晃(タイと中国のミエン系ヤオ族)。

そのほか、今回は、特定の民族を超えた独自の分析視角から研究を行っている者も参加している。たとえば、写真という表象手段を通じて見た民族像(孫潔)、文化資源としての銅像(高山陽子)の研究が挙げられる。また、これまで研究対象として陸上民がもっぱら扱われてきたが、近年陸上がりしたとはいえ水上居民の研究(長沼さやか)も、陸上民との違いから、注目される。このように、特定の地域・民族およびそれらを越えた、あるいは視点の異なる研究テーマを加えることによって、いっそう厚みを増した研究成果が期待されるのである。

#### 歴史学との共同作業

本研究の特徴の一つとして、「南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」という副題が示すように、文化人類学と歴史学との共同作業が挙げられる。

清代以降のイ族の歴史的研究を行っている野本敬は、イ族自身が自らの歴史をどうとらえ、いかに民族文化資源の形成を進めてきたか研究する予定である。また、これまでの民族研究が、とかく近代以降に画定された国境を前提にしがちであったが、武内房司には中国と東南アジア大陸部との国境を越える動きなど、国境を相対化するような歴史研究が期待される。また上野稔弘は民族史誌の編纂作業をめぐる民族イメージの形成と変遷を検討する予定である。民族史誌編纂の作業は、過去の民族文化の検証のためであるばかりではなく、今日的な文化の顕彰と不可分の関係にある点からいえば、歴史を扱うことは現在の分析をも意味する。さらに塚田誠之は歴史文献と聞き取り調査の両方から得られた材料を駆使する意味での歴史民族学の方法を用いている。人類学と歴史学との共同作業の重要性は、人類学研究においても歴史や歴史文献を対象としたりそれを駆使した研究が出現している現在、あらためていうまでもなからう。こうした歴史学と人類学との共同作業をいっそう深め、奥行きのある研究成果を得るべく企図している。

#### 【参考文献】

- 今村仁司 2004「資源の概念」文部科学省科学研究費補助金特定領域研究『資源の配分と共有に関する人類学的統合領域の構築—象徴系と生態系の連関をとらえて』中間成果論集 pp.12-15。
- 木下直之 2002「人が資源を口にする時」『文化資源学』1:1-5。
- 清水展 2007「文化を資源化する意味付与の実践」山下晋司編『資源化する文化』(シリーズ「資源人類学」02) pp.123-150 弘文堂。

#### つかだ しげゆき

先端人類科学研究部教授。中国南部地域の諸民族、とくに広西のチワン族を中心に歴史民族学的研究を行ってきた。近年、チワン族文化の資源化や中越国境地域の文化動態に関心を抱いている。最近の編著に『中国国境地域の移動と交流：近現代中国の南と北』(有志舎 2010年)、『民族表象のポリティクス：中国南部における人類学・歴史学的研究』(風響社 2008年)など。